

K. マルクスの物象化論

—マルクスとハイデッガー (2-2)—

秋 田 清

1 問題の所在

さきに私は、廣松渉に学びながら、マルクスにおいて「疎外論」から「物象化論」への叙述の方法の転換がいかになされていくかを見た¹⁾。

廣松は、『自己疎外』はそれを待ってのみマルクス主義が成立した当のもの」であるとしながらも、疎外論は「疎外されざる人間」を前提として、それを歴史の主体としているが、そうしたものは存在しない²⁾。「人間の本質は、個々の個人に〈共通に〉内在する抽象的一般者 (Abstraktum) ではない。人間の本質 (人間という存在者) は、社会的諸関係の総体 (Ensemble) である」。こうした人間把握を基礎に、「マルクスは『類的存在』として人間というフォイエルバハの主体概念からの脱却と相即的にかくのごとき新たな主体概念をとるに到ったのである」という。

そうして、「商品生産が汎通的な社会にあっては、共同主観的、社会的に、ひとつの自立的な対象性として、単に共同主観的な認識の対象としてではなく、現実的に *gelten* している」価値をアルケーとすることによって、マルクスは「資本論の弁証法」を展開することができた。すなわち「マルクスは、商品はしかじかであるという命題の述語を次々主語に送り込んで、あるしかじかの商品は貨幣である、あるかくかくの商品は資本である、というように、具体的・現実的な場面で主語の重層的な具体化を遂行しうる」という。

ただ、廣松も語るように、「実体=主体の自己定立、自己疎外を抜きにして果たして弁証法の論理が存立しうるか？ 弁証法の機動力が失われはしないか？」という問題は残る。これに対して廣松は、「ある種の場面では歴史的・現実的な運動の追認として、主語の自己運動であるかのごとく扱いうる場面もある。しかし、事象そのものの歴史的運動に機動力を帰しうるのは、歴史性と論理性が一致する限りにおいてであって」、「歴史性と論理性が常に必ずしも合致しない限り、体系の展開は、ヘーゲルが観望者 Zuseher の位置に置いた *für uns* (われわれにとって) というときの *wir* (われわれ) の資格における賓術、これによって *ein geistig Konkretes* (精神的に具体的なもの) が再生産される」。つまり、ヘーゲルの場合には、ヘーゲルが体系の「舞台回し」をしており、マルクスの体系においては、マルクスが「賓術」をしている、という。だが、問題はそれがいかなる観点からなされているかということである。

ヘーゲルは『法の哲学』において、直接的で、自然で、未発達な家族における共同体精神の形態から出発し、市民社会における共同体の分裂へと向かい、最終的には、共同体精神のふたつの一面的な形式が国家において真に統一されるというかたちで共同体精神の実現の過程を叙述する。

マルクスは、すでに見たように、『経済学・哲学草稿』において、人間を自然的、共同的、意識的存在であると規定し、それらの人間の本質 (人間的存在) の疎外として、私的所有 (私有財産) を捉え、さらに、人間を受苦的存在—自らの欲求を外部に持ち、したがって対象的活動をせ

ざるを得ないものと捉え、この対象的活動が対象と自らを、したがってまた欲求を変化させざるを得ない存在であるとして、歴史的展開の根拠としている。

その際、マルクスも、ヘーゲルと同様に、人間の普遍性の発展を展望するが、ヘーゲルと違って、人間を何よりも自然的存在と捉えるがゆえに、真に人間的な社会の実現を目指すことになる。すなわち、ヘーゲルにおいては、市民社会における矛盾は国家において解消されているものとみなされるが、マルクスは、市民社会の矛盾・対立の現実的な解決を目指し、国家の廃棄を問題にする。それは、さしあたり、人間と自然、人間と他の人間（社会）の矛盾の廃棄、人間の自由の実現を展望する形で展開されている。

また、本稿が直接の課題としている「価値形態論」との関係で、この問題をみれば、「市民社会」を特殊性と普遍性の矛盾の展開として捉えるヘーゲルは、『法の哲学』において次のように述べている。

特殊的人格として自分が自分にとって目的であるところの具体的人格が、もろもろの欲求のかたまりとして、また自然必然性と恣意との混合したものとして、市民社会の一方の原理である。一ところが特殊的人格は、本質的に他人のこのような特殊性と関連している。したがってどの特殊的人格も、他の特殊的人格を通じて、そしてそれと同時に、まったく普遍性の形式というもう一方の原理によって媒介されたものとしてだけ、おのれを貫徹し満足させるのである（『法の哲学』Ⅱ， §182）。

諸個人は、この外的国家の市民として、おのれ自身の利益を目的とする私的人格である。したがって普遍的なものは諸個人には手段として現象するが、諸個人の目的は普遍的なものによって媒介されているから、彼らの目的が彼らによって達成されるのは、ただ彼ら自身が彼らの知と意思の働きと行動とを、普遍的な仕方と規定し、彼ら自身をこの連関の鎖の一環たらしめる限りにおいてだけである（ibid, §187）。

ヘーゲルは「特殊性と普遍性は離れ離れになっただけで、それでもなお両者は、相互に結びつけられ、相互に制約しあっている」（ibid, §184, 「追加」）という。その形式だけを見れば、「価値形態論」において、マルクスが展開の論理としているものは、ヘーゲルの上記引用と類似のものである。だが、国家を人倫の体系として描き、現状の合理的解釈を行うヘーゲルと、貨幣に対する物心崇拜を暴くマルクスとは決定的な違いがある³⁾。

ともあれ、「第三節、価値形態あるいは交換価値」および「第四節、商品の呪物的性格とその秘密」をみることにしよう。

2 価値形態または交換価値

マルクスは、資本制社会における「富の原基形態」である商品进行分析し、それが使用価値と価値から成るものとし、価値の社会的実体を抽象的人間労働としたのち、「第三節、価値形態または交換価値」において、「商品の価値対象性は、どうにもつかまえておけないものだ」と、次のように述べる。

商品体の感覚的に粗雑な対象性とは反対に、商品の価値対象性には一分子の自然素材も入っていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえておけないのである。とはいえ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現である限りでのみ価値対象性を持っているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的

であるということ思い出せば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちには現れないということもまたおのずから明らかである。われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追求したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない（『資本論』, p. 93）。

マルクスは、価値の実体が社会的なものであること、したがって、それは商品と商品との社会的な関係のうちには現れないことを確認し、価値の現象形態に「再び帰る」という。「再び帰る」というのは、価値の社会的実体が抽象的人間労働であることを明らかにしたのであるから、それがいかに自己を表すかを展開しようとしているかのようにもとれる。一面ではそのようにもいえる。しかし、それだけならば、一商品と他の一商品との等値（交換）からはじめる必要はない。彼がここでやろうとしていることは、現実の社会（資本制社会）が行っている、価値の抽象とその人間労働への還元をも、同時に叙述（展開）することである⁴⁾。

それは冒頭「商品」の提示の際にも示されたように、人々の日常意識に現れ、さしあたり、体系構成者であるマルクスおよびその読者の意識にも事実として現象する事象を分析することを通して、ブルジョア社会の総体を諸概念の重層的構成によって批判的に解明しようとしているのである。それゆえに、マルクスは、「諸商品は、……一つの共通な価値形態—貨幣形態を持っていることは……誰でも知っていることである」として、「諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をそのもっとも単純なもっとも目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである」（ibid, p. 94）と、「価値形態」論の課題を設定する。

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

「A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」とは、「x 量の商品 A = y 量の商品 B または x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する。（20エレのリンネル = 1 着の上着 または 20エレのリンネルは一着の上着に値する）」である。この「一」すなわち「価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態」の冒頭で、彼は、「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる」（ibid, p. 94）という。われわれもこのマルクスの言葉に従って、この項に焦点を当ててみていこう。

この関係をマルクスは、次のようにいう。

ここでは、二つの商品 A と B、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの異なった役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表しており、上着はこの価値表現の材料として役立っている。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を表している。第一の商品の価値は相対的価値としてあらわされる。言い換えれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言い換えれば、その商品は等価形態にある。

相対的価値形態と等価形態とは、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契機であるが、同時にまた、同じ価値表現の、互いに排除しあう、また対立する両端、両極である（ibid, pp. 94-95）。

この関係は、1 着の上着 = 20エレのリンネルという逆の関係も含んでいる。だが上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そうすると上着に代わってリンネルが等価物になる。マルクスは、相対的価値形態と等価形態とは、不可分な契機であるが、互いに排除しあう、対立する両極であるという。このことを確認してマルクスは、「a 相対的価値形態の内実」にうつる。

「一商品の単純な価値表現が二つの価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけるためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からまったくはなれて考察しなければならない」(ibid, p. 96)。質的に見た場合、リンネル＝上着というのが等式の基礎であるが、「質的に等置された二つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？」(ibid, p. 97)。

リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換されうるもの」としての上着に対して持つ関係によって、である。この関係の中では、上着は、価値の存在形態として、価値物として、認められる。なぜならば、ただこのような価値物としてのみ、上着はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれぞれ自身の価値存在が現れてくる。すなわち独立な表現を与えられる。なぜならば、ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されるものとしての上着に関係することができるからである (ibid, p. 97)。

上着が価値物としてリンネルに等値されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、確かに、上着を作る裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の異なった具体的労働である。しかし、織布との等値は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちに現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織る限りでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり抽象的労働であるということが、言われているのである (ibid, p. 98)。

周知の「回り道」についての論述である。この関係においては織布も裁縫労働も、「抽象的労働」に還元されていることが示されているのである⁵⁾。だが、「価値としては商品は人間労働の単なる凝固である」というかぎり商品を価値抽象に還元するが、「商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない」。リンネルが上着と等置されることによって、上着はその現物形態、すなわち使用価値でリンネルの価値を表している。すなわち上着は価値物として認められる。つまり、「リンネルの価値関係の中では、上着はただこの面からだけ、したがってただ具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、認められる。……とはいえ、リンネルに対して上着が価値を表すということは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態を取ることは、できないことである」(ibid, p. 100)。

こうして、上着がリンネルの等価物になっている価値関係の中では、上着形態は価値形態として認められる。それだから、商品リンネルの価値が商品上着の身体で表され、一商品の価値が他の商品の使用価値で表されるのである。使用価値としてはリンネルは上着とは感覚的に違ったものであるが、価値としてはそれは「上着に等しいもの」であり、したがって上着に見えるのである。このようにして、リンネルは自分の現物形態とは違った価値形態を受け取る (ibid, p. 101)。

このようにして、「一商品 A (リンネル) は、その価値を異種の一商品 B (上着) の使用価値で表すことによって、商品 B そのものに、一つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける」(ibid, p. 106) とマルクスは、等価形態の分析に移る。「リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだけということによって、表現するのである。したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である」(ibid, p. 107)。

上着は、その価値形態にかかわらずなく、労働時間によって規定されている一定の価値量をもっているが等価形態にある商品の価値量は価値量としての表現は与えられていない。あるもの（上着）の一定量として現れるだけである。したがって、「等価形態の考察に際して目に付く第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである」。ここでは「商品の現物形態が価値形態になるのである」。しかし、現物形態が価値形態になるという「とりかえ」が起こるのは任意の一商品 A が商品 B に対してとる価値関係の中だけである。

どんな商品も、等価物としての自分自身に関係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は他の商品を等価物として、それに関係しなければならないのである。すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである (ibid, p. 108)。

……ところが、上着は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわちそれらの価値、純粋に社会的なあるものを代表しているのである (ibid, pp. 109-110)。

リンネルの相対的価値形態は、自らの価値存在を、その身体や諸属性とはまったく違ったもの、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、「それがあつた社会的関係を包蔵していることを暗示している」。等価形態については逆である。等価形態にある一商品（たとえば上着）は、あるがままの姿で、価値を表現している。つまり生まれながらに価値形態を持っている。だがこのことは、「ただリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係の中で認められているだけである」(ibid, p. 110)⁶⁾。

等価物として役立つ商品の身体は、常に抽象的人間労働の具体化として認められ、しかも常に一定の有用な具体的労働の生産物である。つまり、この具体的な労働が抽象的人間労働の表現になるのである。たとえば上着が抽象的人間労働の単なる実現として認められるならば、実際に上着に実現される裁縫は抽象的人間労働の単なる実現形態として認められるのである。……このような価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるというその抽象的属性のほかにはなにも反映してはならないのである (ibid, p. 111)。

こうしてマルクスは、等価形態の第二の特色として「具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になる」(ibid, p. 112) ことをあげる⁷⁾。

しかしまた、裁縫という具体的労働が無差別な人間労働の単なる表現として認められることによって、他の労働との同等性の形態を持つのであり、「したがってまた、それは、すべての他の商品生産労働と同じに私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働なのである。それだからこそ、この労働は、他の商品と直接に交換されうる労働となって現れるのである。だから、私的労働がその反対の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になれるということは、等価形態の第三の特色である」(ibid, p. 112)⁸⁾。

これまで見てきた展開を、「四 単純な価値形態の全体」で総括してマルクスは、第一章のはじめに述べた「商品は使用価値とともに交換価値であると言ったが、厳密に言えば間違いだった。商品は、使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである」といい、先に引用したように「商品の価値形態または価値表現は商品の本姓から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない」(ibid, p. 116) と述べる。すなわち、商品生産社会という一定の社会関係が、価値形態や交換価値を生み出すのである⁹⁾。

労働生産物は、どんな社会状態の中でも使用対象であるが、しかし労働生産物を商品にするのは、唯、一つの歴史的に規定された発展段階、すなわち使用物の生産に支出された労働をその物の「対象的」な属性として、すなわちその物の価値として表すような発展段階だけなのである (ibid, p. 117)。

マルクスはこのように述べ、「個別的な価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する」(ibid, p. 118) として「B 全体的な、又は展開された価値形態」に移る。

B 全体的な、または展開された価値形態

全体的な価値形態とは、z 量の商品 A = u 量の商品 B または = v 量の商品 C また = w 量の商品 D または x 量の商品 E または = etc. である (20エレのリンネル = 一着の上着 または 10ポンドの茶 または = 40ポンドのコーヒー または = 一クォーターの小麦 または = 2オンスの金 または = 1/2トンの鉄 または = その他)。

ここでは「ある一つの商品、たとえばリンネルの価値は、今では商品世界の無数の他の要素で表現される。他の商品はどれでもリンネルになる。こうして、価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現れる。なぜならば、このリンネル価値を形成する労働は、いまや明瞭に、他のどの人間労働でもそれに等しいとされる労働として表されているからである」。「今ではリンネルはその価値形態によって……商品世界に対して社会的な関係に立つのである」(ibid, p. 119)。

第一の形態、20エレのリンネル = 一着の上着では、これらの二つの商品が一定の量的な割合で交換されうることは、偶然的事実でありうる。これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違って、それを規定している背景が、すぐに現れてくる。リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄などの無数の違った所持者のものである無数の違った商品のどれで表されようと、常に同じ大きさのものである (ibid, p. 120)。

したがって、ここでは、「交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ、ということが明らかになるのである」(ibid)。

上着や茶や小麦や鉄などの商品はどれもリンネルの価値表現では等価物として、したがってまた価値体として、認められている。これらの商品のそれぞれの特定の現物形態は、今では他の多くのものと並んで一つの特等的等価形態である。同様に、いろいろな商品体に含まれているさまざまな特定の具体的な有用な労働種類も、今では、ちょうどその数だけの、人間労働の特殊な実現形態または現物形態として認められているのである」(ibid, pp. 120-21)。

特定の有用な労働が人間労働の特等的実現形態すなわち「特等的等価形態」として認められるのである。

だが、全体的価値形態には、次のような欠陥がある。第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の寄木細工をなしている。第三に、この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である。また、展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。ここでは、それぞれが互いに排斥しあう制限された等価形態がある

だけであり、それぞれの特殊的商品等価物に含まれている特定の具体的な有用な労働種類も、ただ、人間労働の特殊な、したがって尽きることのない現象形態である。人間労働は完全な、また全体的な現象形態を、特殊な諸現象形態のうちに持っている。しかし、そこでは人間労働は統一的な現象形態をもってはいないのである (ibid, pp. 121-122)。

しかし、展開された価値形態は、単純な相対的価値形態の総計からなっている。たとえば、

20エレのリンネル = 1 着の上着

20エレのリンネル = 10ポンドの茶

これらの等式を逆にすれば

1 着の上着 = 20エレのリンネル

10ポンドの茶 = 20エレのリンネル

を含んでいる。すなわち、リンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければ、従ってまた彼らのいろいろの商品を同じ第三の商品、リンネルで表現しなければならない。したがって逆関係を表現すれば、「C 一般的価値形態」をうる。

C 一般的価値形態

一般的価値形態は次のように表される。

1 着の上着	=	} 20エレの商品
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1 クォーターの小麦	=	
2 オンスの金	=	
x 量の商品 A	=	
等々の商品	=	

いろいろの商品はそれぞれの価値をここでは①ただ一つの商品で、単純に表しており、②同じ商品で、統一的に表している。この形態では、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つと同じ商品で表現しており、すべての商品の価値を、それらの商品とリンネルとの同等性によって表しており、「どの商品の価値も、今ではその商品自身の使用価値から区別されるだけでなく、一切の使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されている」(ibid, p. 125)。

前二者の価値形態においては、「自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしに成し遂げる」が、「一般的等価形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する」(ibid)。

諸商品の価値対象性は、それがこれらのものの純粋に「社会的な定在」であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会関係によってのみ表現されるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められる形態でなければならないということが、明瞭に現われてくるのである (ibid, pp. 125-26)。

かくして、「商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品、リンネルに、一般的等価物という性格を押しつける」(ibid, p. 126)。こうして、「一般的価値形態は、この世界の中では労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているということを明らかにしているのである」(ibid)。

相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応する。しかし、これは注意を要することであるが、等価形態の発展はただ相対的価値形態の発展の表現の結果でしかないのである。

一商品の単純な個別的な相対的価値形態は、他の一商品を個別的等価物にする。相対的価値の展開された形態、すなわちすべての他の商品での一商品の価値の表現は、これらの商品にいろいろ違った種類の特殊的等価物という形態を刻印する。最後に、ある特殊な商品種類が一般的等価形態を与えられるのであるが、それは、すべての他の商品がこの商品種類を自分たちの統一的な価値形態の材料にするからである (ibid, p. 127)。

したがって、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、相対的価値形態と等価形態との対立も発展する。しかし、第Ⅰの形態では、その対立を固定させてはいないし、第Ⅱの形態でも諸商品がそれぞれの相対的価値を総体的に展開しうるだけである。だが、第Ⅲの形態への移項、すなわち第Ⅱの形態の二つの辺を置き換えることは、「この等式の全性格を変えて、これを全体的価値形態から一般的価値形態に転化させることなしには、不可能である」。この第Ⅲの形態は「ただ一つの例外を除いて、商品世界に属する全商品が一般的等価形態から排除されているからであり、またその限りのことである」 (ibid, p. 128)。

この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は、客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをもちえたのである。

そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言い換えれば、貨幣として機能する (ibid, p. 130)。

この一般的等価形態が「社会的習慣によって最終的に商品金の独自の現物形態と合生」したとき、金が貨幣商品になったとき、一般的等価形態は貨幣形態に転化するのである。「労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっている」こと、すなわち、個人的にであれ、社会的にであれ、一定の必要を満たすものを作り出す労働と、個人的にであれ社会的にであれ、必要に応じた労働の配分が行われなければならないということが、一般的等価物、貨幣と交換される、つまり買われるという形で成されるようになるのである。

マルクスは、うえに見てきたような展開をし、貨幣のなぞを明らかにし、「単純な商品形態は貨幣形態の萌芽である」 (ibid, p. 133) とのべ「第四節 商品の呪物的性格とその秘密」に移る。

3 商品の呪物的性格とその秘密

マルクスはここで、生産物が商品となる時、「たとえば、木材で机を作れば、木材の形は変えられる。それにもかかわらず、机はやはり木材であり、ありふれた感覚的なものである。ところが、机が商品として現れるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的なものになってしまう」 (ibid, p. 133) といい、この謎を解き明かす。

商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこない。それはまた価値規定の内容からも出てこない。なぜなら、第一に、いろいろな有用労働または生産活動がどんなに違っていようとも、それらが人間有機体の諸機能だということ、また、このような機能は、その内容や形態がどうであろうと、どれも本質的には人間の脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出だということは、生理学上の真理だからである。第二に、価値量の規定の根底にあるもの、すなわち前述の支出の継続時間、また労働の量について

例えば、この量は感覚的にも労働の質とは区別されうるものである。どんな状態のもとでも、生活手段の生産に費やされる労働時間は、人間の関心事でなければならなかった。……最後に、人間が何かの仕方方で相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的な形態を持つことになるからである (ibid, p. 134)。

それでは、労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？ 明らかにこの形態そのものからである。いろいろな人間労働の同等性はいろいろの労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的既定が実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。

だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間に対して人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらのものの社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き換え〔Quid-proquo〕によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に、超感覚的なもの、社会的なものになるのである (ibid, p. 135)。

労働生産物が商品として生産されるときにこれに付着する「感覚的であると同時に、超感覚的なもの」をマルクスは「呪物崇拜」と呼ぶ。そうして、この「呪物崇拜」の廃棄に関して次のように言う。

社会的な生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである。しかし、そのためには、社会的な物質的基礎または一連の物質的存在条件が必要であり、この条件がまた一つの長い苦悩に満ちた発展史の自然発生的な所産なのである (ibid, p. 147)

マルクスはここで、自然発生的な発展史に「意識的計画的な制御」を対置している。だがその発展史は、「一つの苦悩に満ちた」ものであった。その苦悩の中から「自由に社会化された人間」が生まれてくるのである。

4 おわりに

ここでマルクスの言う「自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御」をいわゆる「計画経済」と誤解してはならない。彼は、「自由に社会化された人間の所産として」と述べている。マルクスが問題にしているのは、「意識的計画的」の内容なのである。単に無政府性と計画性が対置されているわけではない¹⁰⁾。まして、貨幣あるいは貨幣経済の下における計画性などをマルクスが語っているわけではない。

マルクスは、さしあたり「能力に応じて働き、必要に応じてとる」社会、さらには他人や社会のために尽くすことを最大の喜びとするような個人あるいは社会を想定している。彼にとっては、利己的な個人を前提にした「交換の廃棄」が問題なのである。そうした新たな社会の条件を資本制社会の生産力の発展が準備するとマルクスが言うとき、それはたんに機械や道具に代表される技術的発展のみを意味しているわけではない。彼は「最大の生産力は労働者である」とも語っている。また、「株式会社形態を資本制社会内における共産主義」ともいう。だがそれもまた、

生産の基礎となる科学技術を体得した労働者や、発展した交通のことをさしているだけではない。資本制社会批判の主体形成を彼は問題にしているのである。彼は、革命運動の意義をたんに古い権力を打ち倒すためだけではなく、新しい社会を準備するためにこそ必要だとも述べている。その果てに、「必然の王国から自由の王国」への転化がある。だが、「自由の王国」が如何なるものかについて、彼は何も語らない。それについては、共産主義とは「現状の矛盾を廃棄する現実の運動」であるというだけである。廣松が言う「マルクスによる賓述」は、この基に展開されている。

先走りがすぎた。ともあれ、マルクスにとっては、資本制社会を必然の王国たらしめているものこそ富が商品形態をとっていることであり、その根拠は労働が二重性を帯びていることであった。必然の王国とは、その廃棄を求めて展開せざるを得ない労働の矛盾とその展開である。

本稿は前稿とともに『資本論』の第1篇第1章について論じたに過ぎない。「マルクスと精神分析」に関して論じるための予備的作業としては、前2稿とともに、さしあたり必要最低限のことには触れた。マルクスについては、今後必要に応じて論じることにはしたい。

〔参考文献〕

マルクス、カール『聖家族』(Die heilige Familie, 1844, 9~1846, 2.) マルクス・エンゲルス全集 (MEW) 2, 大月書店, 1960年。

『資本論』(Das Kapital, 1973年, (初版1867年)) 岡崎次郎訳, 第1巻, 第1分冊, 国民文庫。

K. 『経済学・哲学草稿』(Marx, Karl, Ökonomische philosophische Manuskripte, 1844.) 田中・城塚訳, 岩波文庫, 1964年。——『経・哲草稿』と略称) である。

『経済学ノート』杉原・重田訳, 未来者, 1962 (Marx, Karl, Aus den Exzerptheften, 1944-45)。

柄谷行人『探求 I』講談社学術文庫, 1992年。

齊藤 環『生き延びるためのラカン』木星叢書 2006年。

中野昌宏『貨幣と精神—生成する構造の謎』ナカニシヤ出版, 2006年。

廣松 渉『マルクス主義の成立過程』, 至誠堂, 1968年 (『成立過程』と略記)。

『マルクス主義の地平』, 勁草書房, 1969年 (『地平』と略記)。

『資本論の哲学』, 現代評論社, 1974年 (『哲学』と略記)。

廣松渉編著『資本論を物象化論を視軸にして読む』岩波セミナーブックス18, 1986年。

註

- 1 拙稿「K. マルクスの疎外論と物象化論」(『別府大学紀要』第48号2007年1月)
- 2 『経済学・哲学草稿』において、マルクスが「疎外されざる人間」を「歴史の主体にしている」とは必ずしもいえないことはすでに述べた (拙稿「マルクスとハイデガー (1)」)。
- 3 柄谷行人が言うように「価値形態論は、貨幣の生成をヘーゲル弁証法的に示すものではなくて、逆に『貨幣』がいかに隠蔽されたかを示すものなのである」(『探求 I』 p. 112)。
- 4 この点に関して中野昌宏は次のように述べている。すなわち「マルクスの言う意味では、交換されるに商品は『はじめは等しくないもの』であり、両商品の等価性の保証としての『価値』というのは事後的にあったことになる限りでそう呼ばれるのであり、それはまた弁証法論理の通時的次元を前提とした『論点先取り』的な項である。したがってマルクスを整合的に読もうとすれば、ほとんど柄谷だけが例外的に正しく指摘しているように、マルクスは『商品 A と商品 B のなかに同量の価値が内在するから、両商品は等置される』と

言っているのではなく、『両商品はまず統治されるから、そのなかに同量の価値があったことになる』と言っているのではしかありえない』（中野，2006, p. 50）。マルクスの価値把握に関して中野が指摘していることは、「弁証法論理の通時的次元」という点も含めて、そのとおりであるが、それはなにも「柄谷だけが例外的に正しく指摘している」と大仰に言うほどのことではない。マルクスが、「価値の実体」ではなく「価値の社会的実体」と述べていることから、また個別的労働力のおおのが「社会的平均労働力として作用」する、あるいは価値量を「社会的に必要な労働量」によって規定されると述べていることから明らかなことである。

だが問題は後で述べるように「弁証法論理の通時的次元」の内実にある。すなわち、それが「社会的」であれ、マルクスが価値の「実体」と述べていることの方法論的意味が問題なのである。逆に言えば、「実体」とみなされているものが、「社会的」であることを明らかにしようとしているのである。

- 5 マルクスはすでに『経済学・哲学草稿』第1草稿前段の途中で、「人類の大部分がこのような抽象的な労働へと還元されるということは、人類の発展において、どのような意味をもつか」（『草稿』 p. 28）という問いを発していた。そこでは、「抽象的労働」はヘーゲルに習って、具体的総体性を欠いた労働という意味で使われている。

また「ミル評注」においては「交換を行っている人間の媒介的な運動は決して社会的な運動でも人間的な運動でもないし、また人間的な関係でもない。それは私的所有と私的所有との抽象的な関係である。そしてこの抽象的な関係が価値であって、この価値の価値としての真に現実的な実存こそなにかんづく貨幣である」（『経済学ノート』 pp. 88-89）と述べている。
- 6 マルクスは、これに注をつけて次のようにいう。「たとえば、ある人が王であるのは、ただ、他の人々が彼に対して臣下として振舞うからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである（ibid, p. 111）。
- 7 齊藤環はラカンの「鏡像段階」を論じる際、「ほんとうに愛されていたのは鏡に映った自分の姿／でも、ふと気がつく／鏡のこちら側には誰もいない」と記しているが、けだしの確な表現である。ただ、「こちら側に誰もいない」のであれば問題はないのだが。
- 8 マルクスは、アリストテレスが「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」ことに気づきながら、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまうことに触れ次のようにいう。「価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるが故の、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間労働の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さを持つようになったとき、はじめてそのなぞが解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間相互の関係が支配的な社会関係であるような社会において、はじめて可能なのである」（ibid, p. 114）。
- 9 注4）において触れたが、「商品の価値形態または価値表現は商品の本姓から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない」というマルクスの叙述は、中野が言うように「弁証法論理の通時的次元を前提とした『論的先取り』的」というのとは趣を異にしている。中野の表現は、形式的、機械的あるいは歴史的論理に妥協し過ぎてはいないか。マルクスは「商品の本姓から出てくる」といっている。マルクスは、社会的物質代謝を行う人間の歴史的諸関係、社会を主体として論じているのである。「理論的方法にあってもまた、主体が、社会が、前提としてつねに表象に思い浮かべられていなければならない」（『経済学批判要綱』, p. 23）。
- 10 この点に関して柄谷は次のように述べている。すなわち「市場経済の均衡作用は、サイバネティックな働きによるのではなく、ここの交換過程において、貨幣所有者による命がけの飛躍という非連続にこそよるのだ。エンゲルスは、市場経済の「社会性と無政府性」の関係を理解しなかった。そのために、無政府性を意識的に管理すれば、すでに「社会性」があるのだから、社会主義に至りうると考えた。それは結局、社会を、共

同体＝単一体系に変えるという、ありふれた考えに行き着く。いうまでもなく、これは古典経済学の思考の延長に過ぎない／そのような思考は、交換に関して、マルクスが『人は意識しないがそう行う（等置する）』といったとき、抱いていた認識と無縁である。等置することにはいかなる合理的根拠もなく、それ以前に規則もない。商品形態に存するこの“社会性”が、その発展した形態の中で消滅したかのように見えたとき、マルクスはそれを改めて強調したのである」（『探求Ⅰ』 pp. 122-23）。